

連続シンポジウム 「分離派建築会誕生 100 年を考える」 第 7 回
分離派建築会の展開 ―新しい都市と社会をめざして

「都市」に託されたもの―滞独時代の山口文象の軌跡

田所辰之助／日本大学

それまでの展覧会活動に加え、創宇社建築会が「新建築思潮講演会」を開催したのが 1929 年(第 1 回)および 1930 年(第 2 回)だった。山口文象はそれぞれ「合理主義反省の要望」「新興建築家の実践とは」を講演し、近代建築の新たな理論的枠組みを希求する姿勢を鮮明にした。

第 2 回講演会を終えた 2 ヶ月後、山口はドイツへ旅立つ。滞独時代の山口については、数冊の日記、ノート類が残されていて、その関心の所在を追うことができる。山口の目はソビエト連邦の都市計画へ向けられ、渡ソしていたエルンスト・マイによるベルリンでの講演記録などがくわしく報告されている。近代建築をとらえ直していくために、山口は「都市」に何を見い出そうとしたのか。分離派建築会は 1928 年の第 7 回展覧会でその活動を休止させ、1930 年には新興建築家連盟の設立が不調に終わった。1920 年代末における日本の近代建築運動の転回を、山口の滞独時代の活動とその軌跡を通じて逆照射していきたい。

ベルリンを拠点にした山口の活動は、ヴァルター・グロピウスの事務所での設計活動にとどまるものではなかった。たとえば、現地の若手建築家とともに「プロレタリア建築展覧会(Proletarische Bauausstellung)」(1931 年)の企画に関わり、その記録をノートに書き残している。ドイツの公共政策のあり方を批判しながら、ソビエト連邦の第一次五カ年計画の概略を紹介し、当時の“希望の大地”への憧憬が記されている。

また「都市建築」をめぐる、その史的発展のプロセスが検証される。新建築思潮講演会で強く主張されていたように、近代建築の理論と表現の乖離に直面した山口が、都市建設の実践のなかに新たな近代建築像を探ろうとしていた様子を読み取れる。それは、近代建築を様式的な思考から解き放ち、社会科学的手法を参照しながら、都市や空間の組織化の技術として建築を定義し直していく作業にほかならない。のちの日本の近代建築運動を彩っていく認識に、山口がどのような過程を経て接近していったのか、滞独時代の活動からその一断面を析出させていきたい。

分離派建築会にはじまる戦前期日本の建築運動は、創宇社建築会の活動を経て新興建築家連盟、日本青年建築家連盟(建築科学研究会)(1932 年)、そして日本工作文化連盟(1936 年)へ至る過程のなかでいくつかの変質を経ることになる。その流れのなかで、山口らが提起した問題がどのように展開されていくのか。「都市」、そして「社会」が建築家たちの分析対象とされていくプロセスについても概観し、分離派建築会以降の展開に関し最後に触れていきたい。



図1 「プロレタリア建築展覧会」(1931年、ベルリン)の会場風景



図2 「プロレタリア建築展覧会」の会場入口

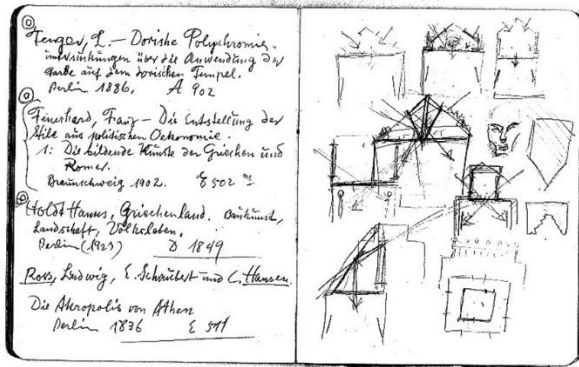


図3 「プロレタリア建築展覧会」:会場構成(採光)の検討



図4 「プロレタリア建築展覧会」
会場での山口文象

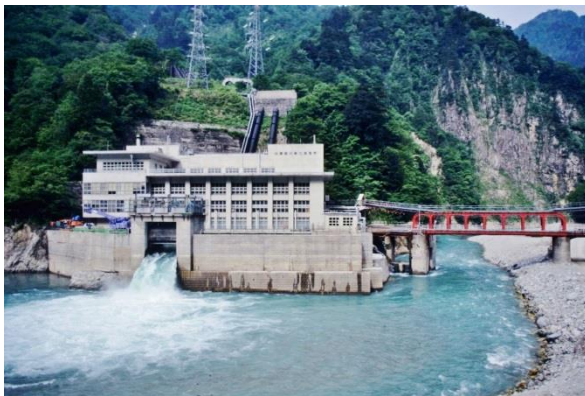


図5 日本電力黒部川第二発電所/山口文象/1936年



図6 ヴァルター・グロピウスの
事務所での山口文象

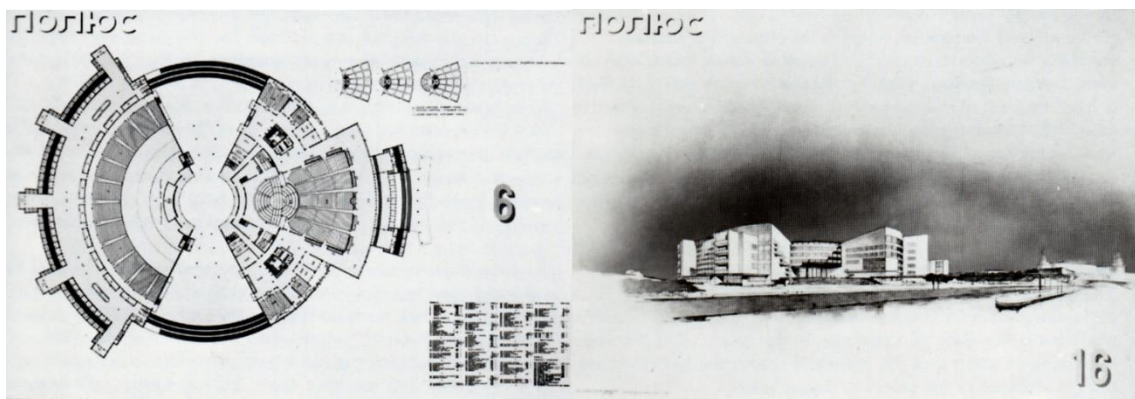


図7 「ソビエト・パレス」コンペ案/ヴァルター・グロピウス/1931年